

第5回文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会
(議事概要)

平成19年3月29日(木)13:00～15:00
六本木アカデミーヒルズ キャラントC

【講演者】 今日お話ししたい一番のポイントは、環境としての歴史ということです。

私たちは現在は都市住民でありまして、都市というものは一朝一夕に成ったわけではありません。私たちが目で見るもの、現実に目に見える風景は、決して歴史をさかのぼることができません。東京は特に関東大震災と第二次大戦のたび重なる空襲によってほとんど焼亡してしまいました。私が現に見ている風景と、先祖が見ていた風景は、それぞれ全然違って、そこには連続性がないわけがあります。そういうことが結局、私たちに歴史というものが環境の非常に重要な要素だということを忘れさせてしまうんですね。

東京には、昭和のごく初頭、昭和2年とか3年ぐらいの建築にかかる街並みが、まだ残っています。たとえば清澄通りに面した清澄商店街なんかはその典型的な一例です。が、表参道ヒルズの一部のように形だけ残したので生活のないものは意味がないと思います。

このごろの、スクラップ・アンド・ビルドによる新しい建築のラッシュにしてもそうです。中には少し昔の趣を残そうと皮一枚だけ残しても中身は全然違って、それでいいかという問題があります。本当にそんなに全部壊して集積化、高層化する必要があるのかどうか考え直してみなければいけないと思います。

とにかく日本では、古いものは汚いし危ないという先入観で、何十年か経つと耐用年数が来て、壊すものだと考えています。

巨大な建築は人間の意識と齟齬をきたします。私たちは結局、身の丈に合った空間というのがあります。せいぜい木造2階建てとか3階建ての建築物だと居心地がいいけれども、40～50階という非常に高層になると、独特の居心地の悪さが出てくるわけがあります。

私たちはもうちょっと歴史性というものの、歴史の連続性というものに思いを致す必要がありはしないだろうか。私たちが日本人であるというアイデンティティは、一体どこにあるのだろうかと思います。

いわゆるニュータウンと言われる都市計画に基づく街に行ってみますと、何とか砂漠に降り立ったような気がします。私は日本ではあまり都市計画はしないほうがよいのではないかという意見です。どうしてかという、都市計画をすると地価が上がってしまうわけ。都市計画をすると地上げが起こって地価が圧倒的に上がってしまう。そうすると、そこで細々と、親子三代佃煮を商っている小さな店なんていうものの路線価が、何倍にも跳ね上がってしまって、じいさんが死ぬと、もう相続できなくなるんです。そういうことは、いくら防ごうと思っても、都市の生態として防ぐことができないので、それは同時に、私たちの祖先から継承されてきた文化をどんどん殺していくことになります。私は都市がスラム化していく生理というものは、どこの国のどこの都市でも、ある意味では避けられないと思います。ただ、それを押しとどめるなり、あるいは再び命を与えて歴史を連続させるか考える必要があります。

そういう意味では、やはり私たちの100年先を走っているイギリスという国は、参考になるところを多分に持っていると思います。1860年のガイドブックがいまでも新本で売っていて、盛んに読まれているわけです。その時代のガイドブックを売っているということは一体何かというと、つまりその時代の歴史的な建築物なり街並みが残っているから、こういうものを見ながら現在の街を歩くと、ロンドンという街は非常におもしろいですね。

また、イギリスにはシビクトラストがあります。これは、建築と都市計画の質を高めることに寄与すること、芸術的な建造物もしくは歴史的に価値のある建造物を保存すること、田園地帯の美しさを守ること、貧弱なデザインあるいは無頓着に由来する醜さを除去もしくは防止すること、公益を刺激して市民のプライドを鼓舞することという五つの目標を実現するために半官半民でこしらえたトラストです。古い、もう使わなくなった駅がありますと、それを壊すかどうかというのではなくて、どう再開発し、再利用していくかということについて知恵を集めてします。いまはロンドン中の古い建物が再利用されて、壊されない時代になってきています。それは何もロンドンに限らず、いたるところにシビクトラストがシビクトラスト賞というものを与えた、景観なり建築、都市計画が存在しています。

これは再開発をするときに、計画を地方自治体を通じてシビクトラストの本部に申し込むことになっています。そうするとシビクトラストでは、審査員を派遣して、その計画を子細に検討します。非常にイギリス的なのは、シビクトラスト賞というのはシビクトラスト賞を与えるというだけで、一切の金品を与えない。名誉しか授与しない賞です。ただ1枚、シビクトラストアワードというプレートをくれます。それが市民のプライドを鼓舞しているわけです。

それからイングリッシュ・ヘリテージというものもあります。イングリッシュ・ヘリテージは貴族の屋敷とかお城に特化しているんですが、たとえばもう一つ、ランドマーケットラストはいわゆる産業遺産のようなもの、駅舎だとか、古くなった水道の配水塔だとか、島の漁業のための見張り小屋だとか、いろいろなものを壊さないで、その中をすっきりリノベーションして、それを一般のホリデーハウスとして安価に貸し出すという活動をしているトラストです。これはナショナルトラストの分派です。

何で一体そんな活動をするかという壊れかかった建物を救いあげていまよみがえらせ、未来を与えようとするものです。そのようにすれば、さまざまな人々の手で歴史的な、あるいは重要な建築物を絶えず継承していくことができるわけです。

つまり生活というものが非常に大事だと。映画のセットか書割のように保存しても、内実はおみやげ屋ばかりみたいなものだ、実はあまり意味がない。そこにちゃんと住んでいて、生活があって、あるいはそういう経験をすることができて、そこでは観光をするのではなくて生活をするということが、非常に大切だと思います。

子どもだって歴史についてすごく興味があるんですね。単に織田信長がどうしたとか、そういう全然別世界のことを暗記するだけというかたちで歴史を教えていくから、切実に歴史が身にしみてこないわけです。そうではなくて、いろいろな時代の街並みや、建物が生きたかたちで残っていて、日々その前を通りながら、「ああ、ここはシャーロック・ホームズに出てくる」とか「銭形平次の家がここらへんだった」ということができるようになれば、おそらく私たちの歴史意識は大きく変わってくるだろうと思います。

歴史には根が生えている。そういう意味での街並みとか建築物を、僕らはもっと大事にして、戦後の開発、開発というような価値観が一種崩壊したこの時代に、もう一度立ち止まって考え直してみる必要があるのではないかと思います。

【座長】 ご指摘のように、日本の街に貧しい部分があるのはもともとですが、ほとんどの街が戦争で焼かれて、とにかく復興しなければいけないという中で、急いで復興するプロセスで建築されたものです。基盤に歴史を尊ぶ姿勢がなかったからこうなったのか。社会経済上しようがなかったのか、もう少し議論する余地はあるかと思います。

上條 歴史の連続性という言葉をいただきましたが、歴史の連続性といっても、近代化とか、利便性とか、そういった言葉で古いものを安全にするというのは人類に必要なことだと思いますが、バランスというか、兼ね合いが一番難しいわけですね。日本でそういうところがうまくいっている例はあるんですか。

【講演者】 たとえばロンドンには地震がありませんから、いわゆる耐震性みたいなことは考慮する必要がないということがあります。ただ、見ていますと、19世紀から連続として続いている家並みをずっと観察していると、確かにそのままではなくて建て直してはいるんですが、前と同じように煉瓦を組んでいきます。結局、リニューアルはしているけれども見た目は変わらないという方法が一つあります。

東京で言いますと、やはり耐震性が問題なので、確かに古い建築を生かそうとするには相当な補強が必要になってくるので、新築するよりも、ものすごくコストがかかるわけです。なおかつ、そんなに便利なものはできないとか、そのところは確かにしようがないところもあると思います。

一つのおもしろい例は、前述の清澄庭園があります。もともと三菱の別邸だったものです。それが後に公共に寄付されるときに、清澄通りと清澄庭園の間に細長い空き地に大家の三菱は鉄筋コンクリート2階建ての商店街をつくったんですね。もちろんテナントが入って家賃を払うわけですが、この家賃で清澄庭園のメンテナンスをしようという、なかなか賢い計画です。

現在もその商店街は残っています。もちろん空襲で焼けましたが、鉄筋コンクリートでできていたので、中の木造部分だけが焼けてコンクリートのいわゆる躯体が残ったんですね。それで戦後、そのコンクリートの躯体に中の木造部分を再び作り直して、元と同じように作り上げて、いまでも使っています。

すべてがそれでは立ち行かないところはもちろんありますが、はたしてすべてをスクラップして集積化することが理にかなっているかどうかという再検討を、虚心坦懐にしてみなければいけない時代ではないかと思えます。

【座長】 歌舞伎座も同じです。終戦直後焼けてしまったものを、昔に倣って再建したんですが、お金がなかったから焼ける前の桃山調のようにきれいになっていませんけれども。それから建築学会も保存運動として会長名で要望書を出して少しずつ向上しています。

上村委員 たとえば六本木ヒルズや多摩ニュータウンとか、そういう整備されたところで赤ちゃんのときから育っていく子どもたちが自分の心を投影する風景といったときに、また違う一つの心になっていくのか。日本人の中にあるDNAみたいなものが残されていてほしいなと思うんですが、人間に与える一つの風景なりたずまいというものの影響を、どんなふうに想像されますか。感覚的なところで結構ですが。

【講演者】 私は等身大の寸法というものが大切だと思います。つまり古い街並みというと、たとえば京都とか金沢とか、そういうものだというのは、すでに一つとらわれた考え方です。そうではなくて、門前仲町でもどこでもいいです。この近辺でもいいし、そういう普通の街の風景が問題だと思います。普通の生活、普通の街並みが大切で、そういうのを見ると、だいたい道は細いですね。

それから、たとえば自分の家から遊ぶところまでどのぐらいの距離があるかということがあります。私も団塊の世代ですけど、子どものころ、近所の空き地で遊んでいたわけです。子どもの足でせいぜい5~6分も歩けば、どこにでも遊ぶ場所がありました。

ところが都市計画をしてしまうと、「ここに公園をつくりましょう」とすると、その公園に行くまでがすごく遠かったりするわけです。そうすると公園まで親が送り迎えしなければ行かれない。私たちの子ども時代のようにそこらへんの道端でビー玉とかメンコをやってゴチャゴチャ育った、そういう時代とは自ずから人間関係、コミュニケーションのあり方が違ってくるに違いないと思うんですね。

そこには常に大人の目があって、危険から子どもを守らなければいけないというので常にだれかが見張っているみたいな、そういうことはやはり子どもの文化に非常に大きな影響を与えて、ありていに言えば、これから子どもの文化はおそらく衰滅に向かうであろうと言わざるを得ないですね。

六本木ヒルズに子どもが育つだろうかという設問をしてみると、私は限りなくそれはペシミスティックに考えています。

そういう意味でも昔の街並みは等身大であったと思うんですね。それが日本的であるということの意味で、大人たちだってやっぱり歩いてちょっと行けるぐらいの距離に何でもあった。そういう飲み屋もあり、寿司屋もありというような等身大の街は、どうしたって整然とは行かないわけです。アジア的混沌というものは、いわゆるヨーロッパ的な美観から言うとは非常に汚らしい街であるということになるけど、私たちの利便性から言うと、それが日本的な街並みの生きている姿だと言わざるを得ないのでありましてね。

【委員】日本は明治維新以降、西洋と結婚したように極端に変わり、赤坂にある日本の迎賓館がまったく西洋そのものであって、向こうの戴冠式と同じようなやり方を日本でも行うということで、外国からお客様がたくさんいらっしゃいます。けれども、迎賓館に入って日本のアイデンティティを感じることはないと思うんですね。少し疑問を感じます。

【講演者】何も日本人が西洋人のまねをすることもなく、私たちは私たちが醤油の味に埋没して暮らしていれば、それでよろしいわけでごさいますね。そういう意味で言うと、確かに迎賓館はまことにどうも植民地的風景ですが、ただ前庭に松の木がずっと植わっておりまして、その枝ぶりが若干日本のかなという気はします。

ただ、たとえば昔恋しい銀座の柳の、あの煉瓦屋敷は、スコットランドから流れてきたウォーターズという建築家がこしらえたもので、18世紀のジョージアンの様式でこしらえたんですね。しかしこれは何十年も経たないうちに、ほとんど全部壊されてしまいます。イギリス的な気候にマッチしている建築物を日本に持ってきて、風通しは悪い、湿気はある、何か暗いということで、結局風土に合わないために、これはすっかり破却されて、いま見るような銀座になります。住み心地からして、実はイギリスのまねをしてもそれは居つかなかった、根づかなかったということがあります。それは別に戦災で壊れたということではありません。自分たちでみんな壊してしまったのです。

だから、いまやたらと高層のものをこしらえても、これがはたして何十年もつのかと思うと、これも言ってみればアメリカの丸飲みかもしれませぬので、そういうことに対して建築家の方々も、もう少し反省をさせていただかないといけないんじゃないかと思っていますところ。

【講演者】ボンジュール。私はパリジェンヌというポイントから話をします。最初に日本に来たとき、東京のコントラストはとても好きでした。すごく高いビルのすぐそばに小さい、かわいい、古い木でできているお家があるという、このコントラストに東京の魅力をすごく感じました。

最初に日本に来たのは15～16年前でしたけど、だんだんコンクリートジャングルになってきていると強く思います。

もう一つは、日本はせっかく2番目の経済大国で、お金持ちで豊かなのに、結局は文化の豊かさが無い。これもすごくショックです。私が強く感じることは、日本がマテリアリズム(物質主義)の国になっていることです。美より便利さのほうが大切という、アメリカの影響だと私は思います。ヨーロッパは違います。もちろん日常生活で、いろいろ便利なことももちろん大切だけど、便利さだけではなくて、人間は日常生活で美しいものを見ることも必要です。美しい人、美しいもの、美しい景色も大切にしています。

最初にパリの話をしたいと思います。パリは建築について、とても法律が厳しいのです。

最初に3区と4区のマレー地区の話をしたいと思います。最初に言いたいのは、パリはずっと素晴らしい、美しい街ではなかったということです。これは人の力で変わったのです。その人はアンドレ・マルローです。彼が60年代に文化省をつくるまでは、マレー地区では16～18世紀のビルにいろいろな職人が入って、すごく変なかたちになっていました。美も全然なくて、本当に汚かった。今ではいろいろ変わりました。外はいじれない、壊せないというのはパリも全部そうです。外はそのままです。でも中は自由に改造できる。これも大切です。

マレー地区は、昔貴族が持っていた館が多いから、カルナバレ館とか、シュリー館とか、スービーズ館とか、全部きれいになっています。マレー地区の道はたとえば宣伝の看板はだめで、もちろんマクドナルドの赤い看板みたいなものも法律的に絶対にだめ。そして色も決まっています。でも、それでマレー地区の調和、ハーモニーがあります。

日常生活も大切です。普通のお店とか、バスとか、いろいろあって、住むのに人気のある場所になっている。だから住むこともとても大切だと思います。

そしてパリは守るだけではなくて、新しいものもつくります。少ないですが。たとえばミッテラン大統領はルーヴル美術館のグラン・ルーヴルのプログラムを出しました。最初は、パリの人はずごく反対の人が多かった。私もそう。でも、いまはずごく好き。だから最初は「えーっ、ひどい」と言われても、ちょっとチャレンジする人も必要です。

エッフェルタワーのときもそうでした。モーパッサンとか、みんな反対して。でも、いまはパリのシンボルになってしまったから、おもしろいですね。

ルーヴル美術館の中にもカフェをつくっています。別にルーヴルの中に入らなくても、普段あそこでカフェだけ飲んでもいい。美術と今の生活のコントラストです。

もう一つの例ですけど、これもコントラストです。これはとても大切な場所なんですけど、Ministere de la Culture(文化省)です。私はいま日本で一番足りないのはこれだと思います。文化大臣が必要です。フランスでは文化省はとても強くて、予算的にもいろいろで、建築だけではなくて芝居、アート、ダンスとか、いろいろやっています。建築はとても大切です。だからぜひ文化省をつくってほしいです。これは強いメッセージです。

私は神楽坂に住んでいます。どうして神楽坂に住んでいるかということ、やっぱり魅力があるからです。一つは、日本の文化とか、下町の雰囲気はずごく感じて、だからそこに住み始めました。石畳とか、小さい路地とか。もう一つは、人と人の関係、心はずごく感じる場所です。だから買い物をするのも小さいお店に行きます。買い物が簡単ということも大切。日常生活が本当に簡単にできて、人と人が話をしながら、本当に人間の心を感じる事が大切だと思います。それから、少しですがまだ芸者さんがいて、これも日本の文化の一つで大切なことだし、あそこは村の雰囲気、プチ・ヴィラージュみたいな雰囲気、私ははずごく忙しいけど、戻ると本当にリラックスする。

だから神楽坂を本当に愛しているんですけど、最近は大きいマンションをつくっています。小さなマンションだったらわかるけど、全然神楽坂の雰囲気と関係のないものです。六本木だったらしょうがない、でも神楽坂と全然合わないのに。全然理解できない。神楽坂の人がみんな反対しても、結局何もできない。どうしてかということ、法律がないからです。

今日来る前に建築家の友だちに電話して、「ビルを壊すときはどうですか」と聞きましたが、全然法律がなくて、もし壊したいなら、そのまま壊せると。これははずごく問題だと思います。壊すときにも、歴史的なもの、たとえば料亭だったら、その料亭が小説の中にもいっぱい出ていたりとか、文化的な重要性を考える必要があります。

そして最近のテレビドラマのロケーションが神楽坂で行われました。このドラマのおかげかどうかかわからないけど、いっぱい観光客が来ています。やっぱりみんな日本の心を感じたいから。いま神楽坂がちょっとブームになっています。やはり日本の文化だけではなく、日本の心を感じる場所なのです。だから、はずごく大切だと思います。

ところで、日本の文化とか日本の伝統的なことが、いまパリで人気があります。日本とはあまり関係のない人なのに、インテリアの中に日本のいいものをたくさん使っています。布団とか、畳とか、障子とか、和紙とか、はずごく人気があって、フランス人は自然に日本の良さを取り入れています。

だから、いま日本人はちょうどいい時期だと思います。新しいアイデンティティ、ルネサンスみたいにして、もっと自信を持って、日本の昔に戻らなくてもいいけど、新しいスタイルを見つける。日本は昔からの素晴らしいものがいっぱいあるから、この良さを使わないと本当にもったいないと思います。

私はちょっと感じたけど、最近若い人のほうが自由に日本のいいところを使っています。たとえばファッションだったら、着物の生地を使いながら、いろいろカットしたりしています。前の時代だったら、着物はちゃんと真面目に着なければならなかったけど、おばあさんが素晴らしい着物を持っているから、せっかくだから生地だから、もっと自由に使っている。新しいレストランにも竹とか和紙とかいろいろあって、この4~5年間に本当に感じるけど、若い人のほうが自由に日本の良さを取り入れています。もっと自信を持って、日本の美とか伝統を日本人に向けて、そして世界に向けてもっと見せたほうがいい。

最後に、いま日本は観光を大切なポイントにしています。私も最近よく講演するんですけど、どうしたらもっと外国人に日本に来てもらえるか。パリは世界中で一番観光客が多い街ですが、日本はまだ少ない。でもだんだん増えているし、ヨーロッパでも日本に観光に行きたい人が増えているけど、東京に来て日本もいいものはあまりないから、ちょっとがっかりします。

たとえば日本橋の名前が小説によく出ているから、日本橋に行くと、ただハイウェイがあつて。だから日本橋をもっと大切にして、おもしろいスポットにしてもいいと思う。東京のハイウェイもまた問題だと思いますが、フランス人は川端康成とか小説をよく読むから、来るとちょっとがっかりします。観光客が来て何も見るものがないから、ちょっと残念です。

【座長】 大変はつきりご指摘いただきました。ありがとうございました。今日はお二人の先生からたくさんおしかりをいただきましたが、これから時間のある限り、ご自由に発言をお願いします。

【委員】 久しぶりにロンドンに行った時に見たシティはステンレスの超高層ビルが建ち並んでいて景観上ひどかったです。ロンドンが東京と違うのは、東京はそこら中に建てていいんですね。東京都の景観審議会の委員をやっていて、都市計画の図面を見せてもらったら、中心の千代田区、新宿区、中央区、港区、全部高さ制限がないんです。

例えば、ニューヨークは高さ制限が決まっています。この地区は高い。この地区も高い。だけど真ん中のところは4~5階建てで抑えている。だから、いかに日本の都市計画というか、景観のコントロールが緩いかがわかります。

それで質問なんですけど、ロンドンはこの地区は高くてもいい、どこはだめだというのは明快に決まっているんですか。たぶん日本の場合はそれをやると、何でわが区だけ差別して、経済活動を抑えるのかという話になるので、なかなか難しいと思うのですが。

【講演者】 イギリス人は割合に法律をつくらない国民です。景観に関して言えば、市民の自治組織が非常に大きな役割を果たしています。街並みが非常にきれいで、看板がなく、色もちゃんとコーディネートされている。フランスではこういうことを法律とか条例で決めますが、イギリスの場合には、これは紳士協定で決めるという、言ってみれば国民的コンセンサスがあるわけです。「これはみんなで決めたことだから守ることになっている」というのがイギリスのやり方です。それを規制する法律はないです。都市があつて、その周囲にグリーンベルトがあつて、その向こうに田園があつて、そこに田園都市が散在しているという都市構造は法律で定められているけれども、その都市の中でどの区域をどうコントロールするかということに関しては、おそらくそういう法律はないと思います。

そこがイギリス的なので、確かにロンドン市庁舎のような妙ちくりんなものができてくる。いまイギリスではオーガニックビルディングというものがはやっています。真っ直ぐ、四角く建てるのではなくて、壁を曲面にするとか、卵型に膨らませるとかですね。

近年のイギリスにはタワービルディング・ディザスターという言葉があるんです。何かというと、1960年代ぐらいに非常にシンプルな、ガラス張りのコンクリートのタワービルディングをいっぱいこしらえたんですね。結局こういうタワービルディングは人間が住むのには適さないということになって、いま1960年代に建てられたタワービルディングを片っ端から壊して、もう1回煉瓦の2階建ての低層住宅につくり直しているところですよ。おそらくあのオーガニックの高層ビルディングも、古い先はあまりいいことにはならないんじゃないかと思っています。

【委員】 イギリスでは高層マンションは禁止されていますね、子どもに良くないといって。データが出ているんです。少しおかしくなるという。日本は何でそれを規制しないのか不思議でしょうがない。

【講演者】 パリは一つだけ失敗がありました。それは70年代のモンパルナスタワーです。理由はわからないけど、これ以外は、高さはすごく大切です。ニューヨークだったら、マンハッタンは高いビルのハーモニーがあると思います。ニューヨークに住んでいたけど、あのエネルギーはおもしろい。だけど空があまり見えず、体が本当に疲れます。高いビルに住むのはもちろん景色はいいけど、人間のためにはあまり良くないと思います。

【委員】 植物が見える高さまでが、本当は人間が住むうえでの限度だと言われています。4～5階までは木が見えるけど、それ以上上がると限界を超えてしまうわけです。朝起きたときが最悪です。何か天国に行ったような感じですよ。(笑)雲の中にいるわけですから。

村上座長 僕はいまの窓の問題はとても大事なことだと思います。人間が生きていくのにフレッシュエアというのはきわめて大切なものです。だからどんなに完璧にエアコンディショニングされていても、完全にクローズされたはめ殺しの窓の中にいる人間は幸福ではないと思います。窓が開いて、たとえば春になったら春風が吹く、冬になったら木枯らしが吹く、そういう自然の営みと一体になったときに初めて幸せだと思います。

【講演者】 小津安二郎の映画を見るとすぐわかるけど、昔の日本の家は風をうまく使った縁側とか、障子とか、お天気やシーズンに合わせたものだったのに、いまはエアコンとかコンクリートになっている。歴史的な素晴らしいセンスを活かしていくべきです。

もう一つは、私はフランス人だから、いま東京にすごく足りないと思うのはカフェテラスです。もちろん日本の天気は夏暑いとか、いろいろあって大変だけど、フレッシュエアを感じると気持ちいいフランスやイタリアみたいに、カフェとか、もっと外で食べられるようにしてほしいと思います。

【委員】 それは道路の管理等とかいろいろ規制があるからできないんです。パリでは道路の土地をお店に貸していますが、それがパリ市の税収の10%近くになっています。だから、街が楽しくなっていて、市も潤っています。日本もやはりやらなければというので、いま一生懸命やり始めています。カフェは経済と観光と楽しさが両立しているんです。

【委員】 パリにはラ・デファンスがありますね。旧パリと新しいパリと分けてつくられた人工的な街ですが、ラ・デファンスに住む人も少しはいると思うんです。パリの人から見ればどういうふうに思っているのかなというのの一つです。

もう一つは、パリのインテリアは本当に日本的なものを上手に使っていますね。一升瓶にもうまく生けたりして、全体としてとてもまとめるのがうまいというか。こういうセンスはかなわないと思うんですが、ドラさんが日本のインテリア、日本家屋の中でヨーロッパとかパリを上手に使っているなど思うものはありますか。

ヨーロッパの中にうまく日本的なものを使うのは、成功している例が結構多いと思うんですが、その反対に日本家屋の中でヨーロッパのものをうまくあしらって、インテリアとしてまとめるというのは、あまりうまく行っていないような気がします。

【講演者】 最初の質問ですが、パリのラ・デファンスのあるところは、80%ぐらいはオフィスだと思います。だから仕事場としてのところですよ。パリ人はラ・デファンスを愛していないし、好きな人は少ないです。

次の質問は、いまの反対で、ヨーロッパ人、フランス、パリ人は日本のものを使う。日本人はテーブルとか、ウエスタンスタイルをそのまま使います。だから結局、反対だと思います。友だちの家に行くと、日本人の基本はウエスタンスタイルで、日本のスタイルより多い。その中に、たまに日本のものが

ある。日本はこれからやっとな、インテリアがおもしろくなってくるということをすごく感じます。いまからはスウェーディッシュスタイルとか、イングリッシュスタイルとか、いっぱい選択肢が増えるから、日本でもおもしろいインテリアができると思います。また、最近は日本人も、日本のものにもちよっと興味を持ち始めたと思います。フランス人はよく東郷神社などの骨董市や蚤の市に行くのですが、5、6年前は日本人は少なくて外国人がすごく多かったんですけど、だんだん日本人も、いままで自分が捨てたものを買いに来るようになってきています。うまくミックスすると新しいスタイルができると思います。ウエスタンスタイルだけ、日本スタイルだけというのではなくて、もっとうまく自然にミックスすればおもしろいと思います。

【座長】 パリでは日本のアニメーションとか、あるいは日本の料理とかがずいぶん人気があるということが報道されますが、ほかの国でパリとかフランスに対してそういう影響を与えている例はあるのでしょうか。日本が割合目立って、パリで特に人気があるのか。

【講演者】 やっと日本のいいところをフランス人が発見していると思います。日本のいろいろな魅力を発見するようになって、すごくエキサイティングな好奇心があるので、すごくうれしいです。いま一番影響があるのは日本だと思います。

【委員】 明治にヨーロッパの文化が日本に入ってきて、日本家屋の中にいすとか机を置く、あのセンスというのは、もちろんヨーロッパの人がインテリアを考えたと思うんですけど、大好きです。ヨーロッパの人が自分の家具を、インテリアを持ってきて、日本家屋に置くと素晴らしいけど、日本人がヨーロッパの家具を持ってきて日本の家屋に置くとうまく行かないと私は感じます。どう思いますか。

コシノ委員 最近のリゾート地に行きますと、日本の旅館とか温泉というエッセンスを盛り込んでいる。大変大きい影響があると思うんですね。それを日本人が逆に発見して、そこから得られるエネルギーを、いま日本に持って帰ろうとしている。大抵、日本人というのは外国人から発見されて、それでやっとな認めるという状況です。

外から見たらいいところも、悪いところも丸見えだと思うんです。フランス人は本当に日本びいきだと思います。私のお友だちのフランス人も、文化に対して大変熱心です。

そういう意味で持ちつ持たれつで、私もパリは長いんですけど、パリに行って日本の良さがある。でも、お互いに影響し合うんですけど、丸飲みはよくないと思うんですね。お互いの歴史を尊敬して、お互いの国はいま何をやるべきかということがしっかりしないといけないと思います。

いまメゾン・エ・オブジェ展には日本から産地が出て、最初、日本人は私一人だったんですけど、最近は新潟県とか、山形県とか、鉄瓶が出たり、現実にとんどん展示会に出しています。だから生活の中に自然に日本のエッセンスがきちんと入っていく要素が、これからもとんどん増えていくと思います。そういうことも一つあると思うんですね。

やはり美しいというのは整理されていることだと思います。その美しい原点というのは、目にうるさくない、ビジュアル的に目に整理されているということだと思います。

それと、コミュニケーションが重要だと思います。隣にだれが住んで、だれが経営者なのかさっぱりわからない。そういうことで街がバラバラになっていく。だから法律でも何でもなく、街並みのコミュニケーションです。そのリーダーシップを取る人がいなければまとまらないでしょうけど。イギリスは憲法がないというけど、紳士的というのはそういうことなんでしょうか。紳士的とか紳士協定というのは。

【講演者】 やっぱり市民革命の国ですので、王様の権利も市民が規定すると。王権は神授されたものではなくして、市民によって契約で付与されているものですから、自分たちの市民としての自立性が最大の権利です。その権利に伴う義務も当然あるという考え方がイギリス的なので、中にそれを守ら

ない人が出てきたとき、イギリスのやり方というのは無力なんですね。だからリージェントパークのところに巨大なモスクができて、全然規制できないんですね。

【講演者】 コミュニケーションはすごく大切だと思います。もう一つは、日本では、残念だけどルール化しないと何もできないと思います。だから日常生活の中で自分のコンシャンスを持つことが大切だと思います。

【講演者】 もし文化を本当に生きたまま保存したいと思うなら、相続税という制度を絶対に改めないでほしいと思います。相続制度が日本の景観をぶち壊し、個人の所有を原則的に認めないという制度になっているので、これを改めない限りはどんな規則をつくっても全部画餅に帰すと思います。

【座長】 今日はお二人から大変おしかりもいただきましたが、人間スケールのコミュニケーションがなければだめだとかたちで、話のベクトルはそろっていたと思います。また国交省に対しては、たくさん法律をつくれというご支援だと思います。ありがとうございました。